

後藤 健次（ごとう・けんじ）

1、プロフィール

詩人。一戸謙三、桜庭芳露に呼びかけ詩誌発行を計画しパストラル詩社を創立。青森県詩壇の創世を築いた。また「北方詩風」を発行、多くの詩人を育てる基盤を作った。

<生没>

1902(明治 35)年3月8日 ~ 1983(昭和 58)年9月 25 日

<青森との関わり>

弘前市に生まれる。日本大学卒業後第五十九銀行八戸支店勤務となり、八戸で詩誌を発行する。

2、作家解説

大正8年詩に深く傾倒した後藤健次は、詩への思いと作品を郷土の詩人福士幸次郎に送り、添削批評の原稿と懇切な返事を受け取る。早速一戸謙三、桜庭芳露らに相談し詩誌を発行することを決める。青森県で最初の詩の結社、「パストラル詩社」が誕生するのである。パストラルとは牧歌の意味で、一戸謙三の命名である。

パストラル詩社は大正12年の解散の時まで、『田園の秋』以下7冊の作品集を刊行し多くの若い詩人を育てる。短歌全盛の時代に、詩の揺籃期が創り出され、その後の詩の運動を推進していく原動力となったという点で詩社の意義は大きい。

上京して日本大学法律科に学んだ後藤健次は、パストラル詩社の指導者として強力な支えとなっていた福士幸次郎宅に出入りして、室生犀星、佐藤惣之助、金子光晴らに会う機会を得る。

大正14年第五十九銀行(現青森銀行)へ入社、八戸支店勤務となる。パストラル詩社の友人に呼びかけて詩誌「北方詩風」を刊行したのは翌15年4月のことで

ある。短歌俳句が中心で、詩を発表する場が全くなかった八戸に「北方詩風」は確実に根つき、反響も大きかった。同人は後藤、一戸、桜庭ほか加藤豊、夢路はるか、須々田龍介、山本芳美、亀石久三郎である。同年9月第5号を出して終刊となる。

昭和5年文芸総合誌「座標」に当たり、詩の部の編集委員となり、詩や詩評を発表する。この時発表した和泉幸一郎を激賞、和泉の詩人としての活動を方向づけることになる。

その後転勤、社会的活動による多忙な生活が続き、詩作を断念、自身の作品集を残さなかったものの、青森県で最初の詩の結社を組織し、詩の基盤を作ったという点で後藤健次は大きな足跡を残した詩人として名をとどめているのである。本名峰夫。

参考 『青森県詩集』上